

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：17401

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20720107

研究課題名 (和文) ドム語の民族誌的言語資料の調査研究

研究課題名 (英文) An Ethnolinguistic Research on the Dom Language

研究代表者

千田 俊太郎 (TIDA SYUNTARO)

熊本大学・文学部・准教授

研究者番号：90464213

研究成果の概要 (和文)：

このプロジェクトの目的はドム人の民族言語学的データを収集し、これまで知られていなかった語彙を含むドムの言語システムを記述・分析することにあった。三回の現地調査の結果得られたデータによりドム語の語彙に見られる語構造上の特徴、および人間の知覚の彼らなりの理解方式が明らかになった。またドム内の方言差や周辺言語との歴史的関係の一部を知ることができた。成果は論文、学会発表、招待講演などで公表した。

研究成果の概要 (英文)：

The aim of this project has been to obtain ethno-linguistic data on Dom people and based on new data describe and analyse the linguistic system of Dom. The data obtained by three field trips, I found unique lexical structures seen in Dom lexical items and their understanding on human perception reflected in linguistic organisation of Dom. The data also enabled me to describe dialectal differences in the Dom area and analyse a part of historical relationships between Dom and neighbouring languages. I presented papers, gave an invited lecture and published papers on the above results.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：パプア・ニューギニア、パプア諸語、文化人類学、言語学

1. 研究開始当初の背景

千田は 1997 年より当時未記述の言語であったドム語の調査・研究に携わってきた。ドム語はパプア・ニューギニアの高地、シンブー州において話されている言語である。ニューギニアの内陸部を中心に分布する言語の

うちオーストロネシア語族に属さない言語はパプア諸語と呼ばれており、ドム語もその一つとされる。このパプア諸語という名称自体、これらの言語が十分に調べられていないことを象徴している。未分類の諸言語を一括して呼ぶためのラベルに過ぎないからであ

る。ドム語の場合、近隣には系統関係の認められる諸言語であるシンブー諸語が分布しており、主に宣教師によってそれらのうちいくつかに関する言語記述がなされたことがある。

ドム語を調査・研究対象としてきた言語学者は、本プロジェクト研究代表者以外になかった。また、系統を同じくするドム語の周辺言語にも、調査・研究活動中の専門家は皆無である。ドム語の資料はこれまで本プロジェクト研究代表者が蓄積してきたものしかないと言ってよい。しかし、これまでのドム語資料はドムの音韻・文法記述を目的として集められてきたものであり、ドムの民族誌を可能にするようなものではなかった。

ドム社会は現在急速に変化しつつある。伝統衣装を日常的に身に付ける者、石斧の使用はすでになくなり、畑作や家畜の飼育法、家の建築法が大きな変貌を遂げ、通過儀礼など伝統行事の多くは今日全くみられない。当然、変化は言語的な側面にも及ぶ。伝統的な生活様式や行動様式に関連する語彙を知らない若者も多い。埋没してゆくのは伝統に関連するものだけではない。資源利用の方法の変化により、若い世代には知られなくなった動植物の名称もあるのである。

そして、西洋文明が流れ込んでくる前の生活を知るものはすでに少ない。

本プロジェクトは如上の状況に対する問題意識に始まった。

2. 研究の目的

ドム語の語彙・テキストという、言語学、人類学の資料として利用されるデータを収集する。特に急速に変化しつつあるドム社会においては、今記録しなければ永久に失われてしまう「ことば」が多く、年配の話を対象にした調査が今必要である。現在起っている語彙の喪失は伝統に関するものばかりではない。例えば「とんぼ」という語彙を知らない若いドムがとんぼを「蝶」と呼んだり、ドム固有の「歯」という語彙を使わずク・ピシンの借用語で「歯」というようなことが起っている。共時的な記述としては、現在のこのような言語使用自体を記述することも重要であるが、ドムの固有語を覚えている世代から聞き取りを行い記録ができなければその語彙は永遠に失われる。基礎語彙にまで変化が及んでいるのだから未知の語彙は多いはずである。語彙が失われてしまうことは比較言語学的な言語の先史研究にも大きな打撃となる。

本プロジェクトの調査に基づいた研究には多くの可能性がある。第一に、単純にデータが増えることによるさまざまな研究の進展がのぞまれる。ドム語のように、データの蓄積が少ない言語では自然発話や語彙のデ

ータが増えること自体が成果であり、これまで知られていなかった音韻・文法現象が発見される可能性もある。第二に、周辺の同系諸言語との歴史的な関係を研究する際に役立つ。これまでに発表された周辺の諸言語のデータの中には動植物語彙や伝統行事に関わるものも多く存在する。このプロジェクトの調査によりこれまでに知られていなかった同源語が多く見つかる可能性が高く、その資料に基づきより精緻な言語比較が可能になると思われる。

3. 研究の方法

本プロジェクトの中核となるのは 現地調査によるデータ収集である。主に年配の話を対象にして、ドムの伝統やドムの民族誌を可能にするデータの収集をする。伝統行事などだけではなく、動植物を含む周りの環境について、またそれらの資源としての利用方式などについてドム語による聞き取り調査を行ない、話者の語りを記録、分析する。各年度の調査は語りの内容のテーマを絞って対象とする。

収集した録音資料、書き取り資料、写真は整理してさらなる言語研究のために利用する。本プロジェクトが目的とする対象データの性質から、語彙の持つ文法的構造、意味論的組織を分析すること、および比較言語学的な研究を行うことになる。

最後の点に関しては本プロジェクトと同時に立ち上げられた科研費プロジェクト「パプア諸語の比較言語学的研究—南ブーゲンヴィル諸語と東シンブー諸語を対象として」(研究代表者 大西正幸)と緊密に連携してゆく。本プロジェクトではドム語の諸方言を、「パプア諸語の比較言語学的研究」ではドム周辺の諸言語を対象とする調査を行うが、連携は調査の段階、および分析の段階で行われる。

4. 研究成果

このプロジェクトの目的はドム人の民族言語学的データを収集し、これまで未調査だった語彙を含むドムの言語システムを記述・分析することにある。

本プロジェクトでは三回の現地調査を行った。その結果多くの発話データ、語彙データが得られた。以上の調査結果に基づき、つぎの成果が得られた。

まず、人間の知覚をドムがどのように理解し、言語表現に反映させているかが明らかになった。ドム語には二つの知覚動詞がある。それぞれの基本義は「見る」と「聞く」であるが、ともに認知的意味をももち、「思う」や「知っている」などの意味で用いられる。また「聞く」は非視覚的な知覚一般を表す動詞として用いられる。構文上の振る舞いの違

いからこれらの動詞がもつ意味の多義的構造を明らかにすることができる。また知覚動詞以外の語彙・表現からも、ドムが人間の知覚を大きく視覚と非視覚的知覚の二つに範疇化して捉えていることが分かる。基本義と派生義の関係を分析するとこれまでに唱えられてきた意味論的一般化では説明できない現象がみられることが分かる。この主題については論文「ドム語の多義 ― 知覚動詞を中心に」にまとめた。

つぎに、ドム語の語彙に見られる語構造上の特徴が明らかになった。ドム語の語彙項目には複数語からなるものが多くみられる。これらはある種「複合語的」にも見えるが、音韻的・形態的振る舞いは明らかに句をなす。ドム語は複統合の対極をなすような類型的特徴をもつということが出来る。この主題ではポーランドのアダム・ミツキエビチ大学にて招待講演を行った。現在論文投稿準備中である。

以上、二点は、ドム語には動詞語根がたいへん少ない、というこれまでに知られてきた性質と関連するもので、ドム語の重要な類型的特徴といえる。

さらに、ドム内の方言差や周辺言語との歴史的関係の一部を知ることができた。これまでに知られているシンブー諸語はすべてが語声調をもっている。トノジェネシスを疑わせるような例もあり、その歴史的発展の究明がまたれるところであった。シンブー諸語の比較により、トーンが分節音と同じくらい規則的な音韻対応を示すことが分かった。また多くのシンブー諸語に共通して次のようなことがいえることが分かった。すなわち、語類によりトーン型の分布が異なること、語の長さにより好まれるトーン型が異なることなどである。トーンの再構も試みたこの成果はシドニー大学で行われた学会にて口頭発表をした。

上のデータと分析をもとに、さらに調査を進めたところ、シンブー諸語のサブグループにトーンが必須のデータであること、ゴリン・グループとクマン・グループの二つが確立できることが分かり、その点を加えて論文「東シンブー諸語サブグループングに向けて」にまとめた。

その後、ドム語の系統的位置付けに関してはさらに研究が進展した。これは本プロジェクトの調査と大西プロジェクトの調査の緊密な連携による。

大西科研の分担者として周辺言語の調査ができたことによるものとして、これまで知られていたクマン語トーンの誤りを正すことができ、ゴリン系方言の資料を加えられた。また、ドム語近隣のディカ・ニマイ語の資料、およびドムから遠いノマネ地区の言語の資料が得られた。これにより、ドムがディカ・

ニマイに最も系統的に近いことがほぼ確実になり、スワウェ諸語がノマネ諸語と近縁である見通しがたつた。そしてトーン変化がより具体的に推定できるようになった。

一方、本プロジェクトの調査でドム語内の方言差がある程度つかめ、これまでのゴリン地区内の調査地域に加えシネシネ地区のドム方言資料を集めることができた。トーンの上ではゴリン地区のドム方言が保守的である。シネシネ地区のドム方言はいくつかの改新を経、トーン再編が進行中である。この変化はシンブー諸語で起こったトーン変化の動機の解明に非常に参考になった。トーン変化の自然さについても議論できる土台ができた。メロディーが後ろにずれる傾向、語頭隆起など、日本語のアクセント変化について言われている傾向がシンブー諸語にも多くあてはまることも分かった。これについてプロジェクトの最終年度にアムステルダムのVU大学にて口頭発表をした。現在論文投稿準備中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 千田俊太郎、2011年「東シンブー諸語サブグループングに向けて」大西正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集 3』総合地球環境学研究所, pp153-182, 査読なし
- ② 千田俊太郎、2009年「ドム語の多義 ― 知覚動詞を中心に」大西正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集 1』, 総合地球環境学研究所インダスプロジェクト, pp95-121, 査読なし

[学会発表] (計5件)

- ① TIDA Syuntarô Multi-word lexical items in Dom, 6th Feb 2012, Adam Mickiewicz University, Poznan, 査読なし
- ② TIDA Syuntarô Tonal evidence for subgrouping the Simbu dialects, Conference on History, contact and classification of Papuan Languages, 3rd Feb 2012, VU University, Amsterdam, 査読あり
- ③ 千田俊太郎、「ドム語 (パプア・ニューギニア) における五段階」、国立国語研究所プロジェクト「節連接へのモーダルの・発話行為的な制限に関する研究」(リーダー: 角田太作) 研究発表会、2010年7月25日、国立国語研究所, 査読なし
- ④ 千田俊太郎、「ドム語と地理について」2008年度日本オセアニア学会関西地区研究例会, 2009年1月31日, 国立民族学博物館, 査読なし

⑤ TIDA Syuntarô ‘Some issues in reconstructing Proto-Simbu tones’, 2nd Sydney Papuanists’ Workshop, 28th June 2008, The University of Sydney, Sydney, Australia, 査読あり

6. 研究組織

(1) 研究代表者

千田 俊太郎 (TIDA SYUNTARO)

熊本大学・文学部・准教授

研究者番号：90464213

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：